

令和5年度～令和7年度 時津町教育委員会指定

時津町立鳴北中学校 研究発表会

研究主題

未来の社会を創造するために、主体的に学ぶ生徒の育成
～対話で学びを深める協働学習を通して～

期日 令和7年10月24日(金)

13:00～13:20

受付

13:20～13:40

全体会1

開会行事

あいさつ

来賓・指導者紹介

基調提案

時津町教育委員会 教育長 相川 節子

研究主任 前原 幹

13:50～14:40

公開授業

3年 道徳 酒井 宏子 (1階 3年4組教室)
題材 「二通の手紙」

2年 数学 嶋田 栄子 (2階 2年2組教室)
単元 「図形の性質の調べ方を考えよう」

※県教委指定公募制研究に係る授業ですので、
研究協議及び指導助言はございません。

1年 社会 村山 秀 (3階 1年2組教室)
単元 「アフリカ州」

14:50～15:50

研究協議

16:00～16:30

全体会2

指導助言

閉会あいさつ

時津町教育委員会 指導主事 岩崎 隼介

時津町立鳴北中学校 校長 山本 将司

注意事項

- ・ 参観者の控え場所は、1階図書室です。全体会1・2については、1階多目的ホールで行います。
- ・ 研究授業後の研究協議は、授業が行われた各階の多目的ホールで行います。



時津町立鳴北中学校

〒851-2107 西彼杵郡時津町久留里郷53番地5

TEL 095-881-1720

Email: meihoku-j@ngs2.cncm.ne.jp

GLOCAL 鳴北

グローバル時代を見据え、より広い視野（GLOBAL）で
地元愛（LOCAL）にあふれる生徒を育成する

1 研究主題

未来の社会を創造するために、主体的に学ぶ生徒の育成
～対話で学びを深める協働学習を通して～

2 主題設定の理由

(1) 生徒の実態から

本校の生徒たちは、素直で真面目に物事に取り組む生徒が多く、言われたことを確実にこなすことができる反面、自分たちから新たな案を出したり、より良いものにしていこうとしたりする創造的な行動については苦手とする傾向がある。

学習面では、発問に対する反応や、グループ学習の場面において、思い付きの発言でその場が活性化することもあるが、その発言の根拠が不十分であることも少なくない。また、グループで活動する場面では、理解力が高い生徒や発言力のある生徒の意見に左右される傾向があり、一人ひとりの学びを深める点において課題を抱えている。

このような生徒の実態を踏まえ、主体的に学ぶ生徒の育成を目指すこと、そしてそのために対話的学習を充実させることが必要であると考え、主題を設定した。対話的学習において、生徒が根拠を明らかにしながら自分の考えを述べる習慣を身に付け、複数の視点をもって物事と向き合ったり、互いに問い返し合ったりしながら、納得解を求めていく中で、次の課題発見や学びを生活に活かす意欲につなげ、主体的に学ぶ生徒を育成することを目指していく。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果から

全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査では、次の項目に課題が見られた。

質問項目	令和5年度実施		
	本校	県	全国
①自分の考えを発表する場面では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか	16.3	18.3	21.9
②課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	20.9	25.8	30.4
③授業で学んだことを、他の学習で生かしていますか	22.1	20.1	24.0

資料① R5全国学力・学習状況調査（生徒質問紙調査）における「当てはまる」の回答率

①、②の項目については、令和5年度実施の全国学力・学習状況調査における質問紙調査で県・全国の平均を下回っており、③の項目については、全国値を下回っている。

上記の結果からも、互いの意見を交わす場面を充実させていくことや、自分の意見を工夫して分かりやすく相手に伝える力の伸長が必要だと感じられる。また、それらの充実を図ることで②や③の項目で問われている「主体性」や「次の学びへの意欲」の向上が期待できると考えた。

3 目指す姿

これまでに明らかになった課題を克服し、予測困難なVUCA時代の社会を創造する一員として生きる力を身に付けた生徒たちの、授業や学校生活における姿を本研究の「目指す姿」として次のように考えた。

- ・自ら課題を発見し、その課題に当事者意識を持って向き合うことができる。
- ・課題に対して自分なりの考えを持ち、それを相手に伝わるよう工夫しながら表現することができる。
- ・多様な意見を基に、より良い解を求め、次の課題発見へとつなげることができる。

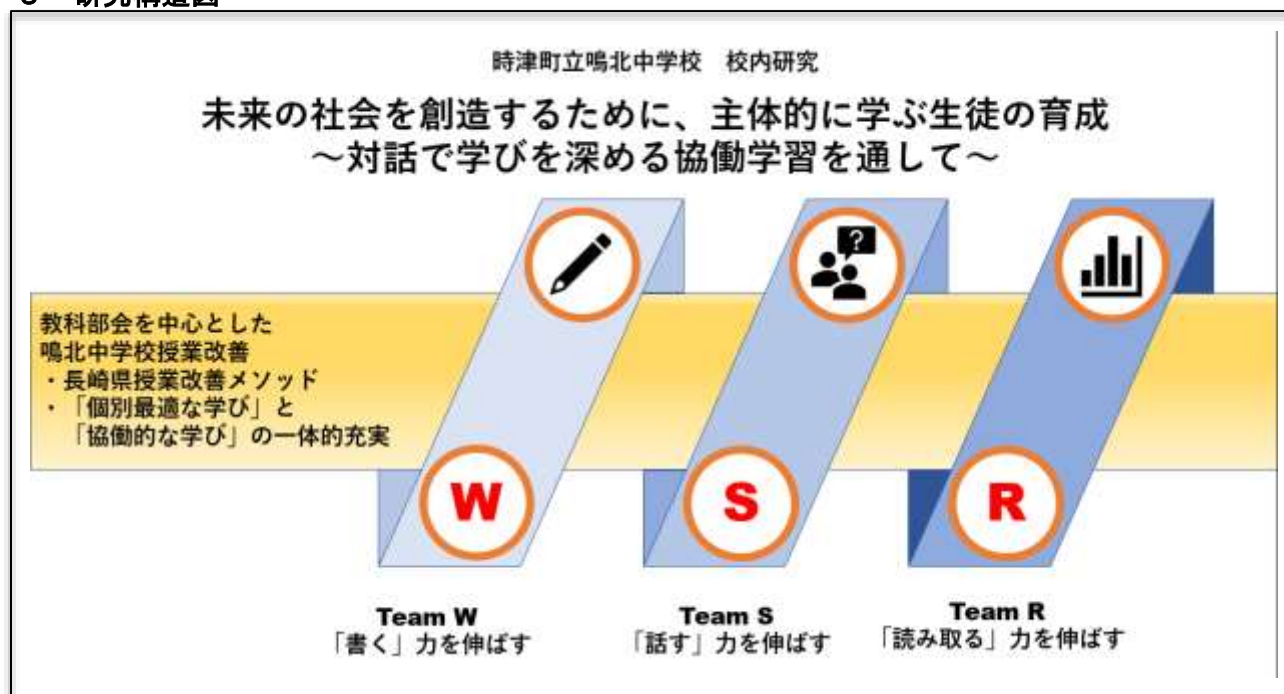
4 研究仮説

学習の過程において、次に挙げるような場面を設定することで、「対話で学びを深める協働学習」が実現し、研究主題に迫ることができると考えた。

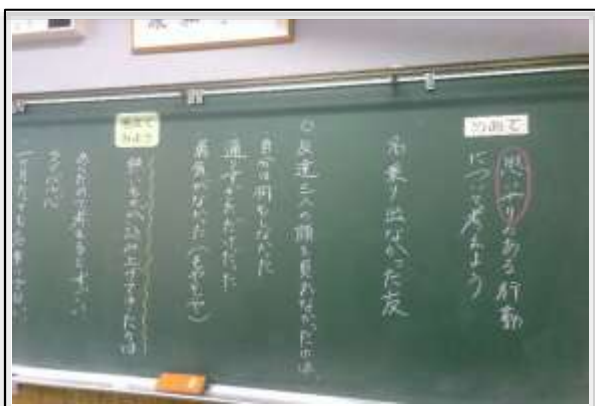
- ・根拠を基に自分の考えを言葉でまとめる場面の設定
- ・生徒同士が問い直したり、複数の視点を基に話し合ったりする場面の設定

ただし、「場面の設定」が目的となり、一方的にその場面を与えることになってはならない。授業者は研究主題を踏まえ、授業のどこで、どのように、その場面を引き出していくか、工夫が必要である。（工夫の一例：資料集p. 41～p. 46参照）

5 研究構造図



研究主題に迫る協働学習を実現するためには、①自分の考えをまとめるための「生徒の『書く』力」②互いの意見を引き出し合うような「生徒の『話す』力」③資料を根拠とするための「生徒の『読み取る』力」をそれぞれに育成する必要があると考え、「チームW」「チームS」「チームR」の3つの研究チームを編成した。加えて、チームRでは、研究の推進を見取るために、資料分析も行った。また、所属する研究チームに留まらず、「長崎県授業改善メソッド」を軸とした授業改善や、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るための教科部会による授業改善にも注力した。



写真① 全ての教室で「めあて」等のマグネットを活用
「めあて」「課題」「まとめ」「ふり返り」



写真② R6. 12. 24時津町教育委員会岩崎指導主事による講義「個別最適な学び」について

6 研究の実際

【チームW】

本研究チームでは、研究仮説の「根拠を基に自分の考えを言葉でまとめる場面」を充実させることにより、研究主題に迫ろうと考えた。そこで、生徒の「根拠を明確にして、自分の考えを持つ姿を引き出し、書く力を高める」ことを目標にして、次のような取組を行った。

(1) 具体的な取組

①「対話する」・「書く」場面の設定

「対話する」・「書く」活動を学校全体で定着化させるために、各教科や道徳科で実践プランを作成し、協働学習や自分の意見を「書く」場面をわかりやすく視覚化した。そうすることにより、どの場面でどのような活動を行うのかがはっきりとし、以前に比べて対話する活動や書く活動が増えた。また、それぞれが実践した活動の情報共有を行うことで、自分の教科では見られない活動も知ることができ、その後の授業づくりの参考にすることができた。

※具体例は、資料集p. 22～p. 36

チームW 実践プラン

第〇学年 〇〇科 単元名「 」 指導者

<単元計画> 単元の目標：

学習内容	時	学習活動	W活動	対話する	個

<W活動例> 「 」

資料② 実践プラン



写真③ 対話する場面



写真④ 自分の考えを書く場面

② R 8 0 を軸とした「書く」活動の充実

R 8 0 とは、自分の考えを接続詞でつないだ 8 0 字以内の 2 文で書く活動である。この活動を行うことで、協働学習によってどのようなことがわかったのかを自分の言葉で整理して表現する力を育てることができた。その結果、根拠を明確にした論理的な思考力が身につけ、協働学習の学びの深まりにつながった。また、教科や内容によっては 8 0 字にとらわれずに、自分の考えをまとめられるように柔軟性を持たせた。

※具体例は、資料集 p. 37～p. 38

資料③ 振り返りシートによる R 8 0 の活用 【3 年 技術科】

A	B	C	D	E	F	G	H	I
6/7	金	2	プログラミングの基礎を確認しよう！	A	B	C	簡単にプログラミングをせず、細かく具体的な内容も打ち込まないといけないとわかった。だから、簡単に考えず、落ち着いてしっかりプログラムしていきたい。	73
6/11	火	1	文字を送受信しよう！	A	A	A	すぐに送るのではなく、サーバを経由しないといけないということがわかりました。なので、一回一回丁寧にプログラミングしていきたいです。	66
6/26	水	1	画像を送受信しよう	A	B	B	送信か、受信かなどをしっかりと判断してすべて合わせないといけないということがわかった。だから、間違わないようにしっかりと見直しをしながらプログラミングしていきたい。	80
7/1	月	2	Lesson 2、3 のプログラミングを確認	A	A	B	自分でプログラミングを一からすると難しくなるとわかった。だから、ひとつひとつの形を覚えて、プログラミングに慣れていきたい。	64
9/17	火	2	チャットの利用規約	A	A	A	たくさんルールがないとチャットを安全に使うことは難しいとわかった。また、普段使っているアプリなどにも利用規約があるはずなので、読み返してみ、自分がしっかり使えているかを見直したいです。	94
10/22	火	2	プロロボを実際に動かしてみよう	A	B	A	少しずつ調整をして、したいように動かすことができました。なので、もっと難しいプログラミングにも挑戦してプロロボを自由に動かせるようにしていきたいです。	74
12/23	月	2	二学期の内容をおさらいしよう。	A	A	A	しないといけないプログラムを忘れていたりしました。なので、細かい部分などもしっかり確認してうまくプログラミングをできるようにしていきたい。	

資料④ 単元のまとめによる R 8 0 の活用 【1 年 社会科】

■ 1 年次、R 8 0 未活用時の単元のまとめ

単元名：古代の日本

学習テーマ：古代の日本では、どのように国家が形成されたのだろうか？

単元のまとめ：昔の日本は占いや外国からの影響、仏教をもとに政治が行われてきた。



※同一人物のもの

■ 3 年次、R 8 0 活用時の単元のまとめ

【注意点】・学習テーマに沿って、**自分の考えを 2 文**で書くこと。

・**2 文を接続詞で結びます。**

・接続詞の例・・・順接(したがって、、ゆえに、だから)逆接(しかし)並列(また、ならびに、かつ)対比(一方)換言(つまり、すなわち)理由説明(なぜなら)

単元名	学習テーマ	単元のまとめ
第一次世界大戦と日本	第一次世界大戦はなぜ起こり、世界と日本にどのような影響を与えたのだろうか。	列強や民族の対立で戦争が勃発し、日本の国際的地位を高めた。また、日本は日英同盟により連合国として参戦し、ドイツに宣戦布告した後ドイツ領や南洋諸島などを占領した。
大正デモクラシーの時代	なぜ日本で民主主義の風潮が高まったのだろうか。	当時藩閥政府や軍による政治の不安定な状態が続き国民の不満が高まった。だから、国民が政治に参加する民主主義という風潮が高まり本格的な政党内閣、原敬内閣が成立した。

(2) アンケート結果より

こうした取組を踏まえて、生徒や職員にアンケートを実施し、その効果を検証した。

資料⑤から、R 6年度においては、「そう思う」「ややそう思う」と答えた職員が 80%であったのに対し、R 7年度においては、100%になっている。このように職員の意識が大きく変わり、多くの教科や

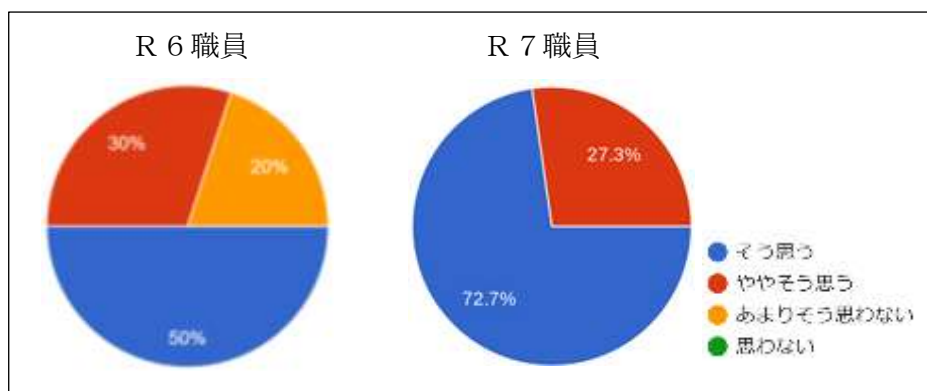
道徳でこれまでよりも対話する活動や、自分の考えを書く活動を多く取り入れるようになった。

しかし、対話する活動自体は増えたが、自分の意見を言って満足してしまうなど、まだ「対話で学びを深める」活動まで至っていない場面も見られるという職員の意見もあった。

一方、生徒の実感としては、8 ページの「チーム S」のアンケート結果②からもわかるように、「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」に肯定的な意見が多く、昨年度と比較しても向上していることがわかる。

職員アンケート

資料⑤「授業で、対話する場面や自分の考えを書く場面を設定することができましたか」



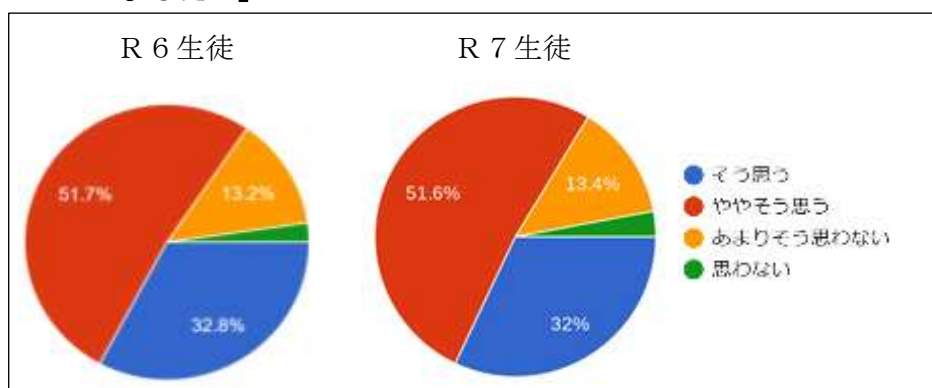
資料⑥から、R 6年度・R 7年度ともに、「そう思う」「ややそう思う」と回答した生徒は約 84%であった。R 80の活動に慣れて、肯定的に捉えている生徒が多い。

一方、令和 7年度のデータでは、「あまりそう思わない」「思わない」と回答した生徒が若干増加している。これは、回答している

学年も変わっているためであると思われる。現在の 2、3 年生を昨年度と経年比較してみると、大きくは変わってはいないが、「ややそう思う」が 3%程度下がり、「そう思う」が 3%程度増加しており、少しではあるが、自分の考えをまとめる力がついてきていると感じている。

生徒アンケート

資料⑥「R 80の活動を通じて、自分の考えをまとめる力はつきましたか」



資料⑦から、R 6 年度においては「そう思う」と回答した生徒は 26 %であったのに対し、R 7 年度においては 34.6 %であった。明らかに自分の考えを、根拠をもとに書くことができていると感じている。

アンケート結果からも、肯定的な意見が多く、自分の考えを書く力がついてきたと思われる。

一方、根拠をもとに自分の考えを書けない生徒、自分の考えをまとめる力がついていない生徒が 15 %程度存在しているので、その生徒への手立てや学習方法を考えていく必要がある。

(3) まとめ

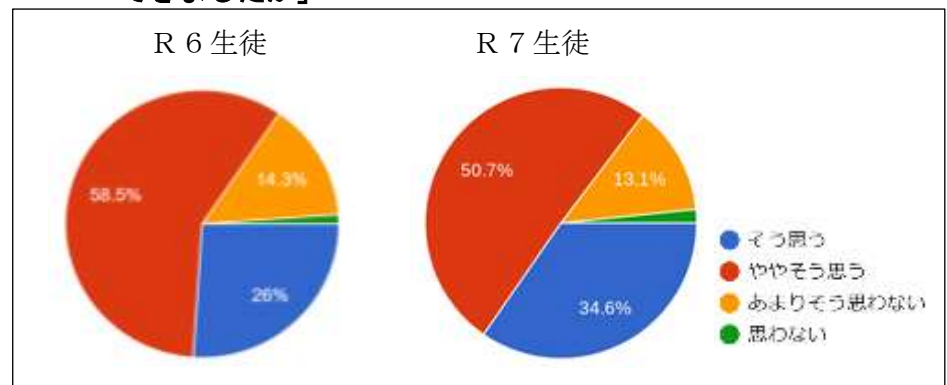
本研究チームの目標である、生徒の「根拠を明確にして、自分の考えを持つ姿を引き出し、書く力を高める」ための取組を行ったことで、教師の意識が変わり、授業の中で対話する活動や自分の考えを書く場面は確実に増えた。また、生徒のアンケート結果からも、根拠を明確にして自分の考えをまとめ、書く力がついてきていることが伺える。

一方、自己との対話はできてきているものの、他者との対話が十分ではなく、協働学習の学びの深まりにはたどり着けていない場面があることや、自分の考えについて根拠をもとに考えることができない生徒も存在することが課題である。

今後は、本研究チームがつけたい「書く力」をいかに協働学習に結び付けていくのかを他の研究チームとも連携しながら、継続して検証していきたい。さらに、個別最適な学びの視点も取り入れながら研究主題に迫っていきたい。

生徒アンケート

資料⑦「自分の考えをまとめるときには、根拠をもとに書くことができましたか」



【チームS】

本研究チームでは、研究仮説の「生徒同士が問い直したり、複数の視点を基に話し合ったりする場面」を充実させることにより、研究主題に迫ろうと考えた。そこで、そのような考えを深める話し合いを行う姿を引き出すために、次のような取組を行った。

（１）具体的な取組

①話し合いの枠組

議論を効率的に進め、建設的な結論に導くため、話し合いを促進する枠組を作った。シンプルで分かりやすい構造を目指したが、教科によっては使いづらさが目立った。枠組み通りに進めると時間もかかるため、状況に合わせて修正した。

②話し合いの約束事

話し合い活動の9か条を基本とし、話し合いのルールを確認できるように各教室に掲示した。また、上手な話し合いのポイント（聞き方）を追加し、円滑で建設的な話し合いができるように工夫した。

③質問の技カードの作成

全校生徒に9つのオープンクエスションの例と、8つの相づちが書かれたカードを作成し、配付した。机の横にかけて、話し合いの時にすぐ見ることができるようにしている。



写真⑤ 質問の技カード

④プレカードの作成

協働学習の相互評価を生徒同士で行うことで、話し合い活動が活発になるのではないかと考え、各教室に、プレカードを準備した。

プレカードの中には、相互評価だけでなく、自身の考えをメモしたり、授業をR80でまとめたりできるようにし、どの授業でも使用できるように工夫した。



写真⑥ プレカード



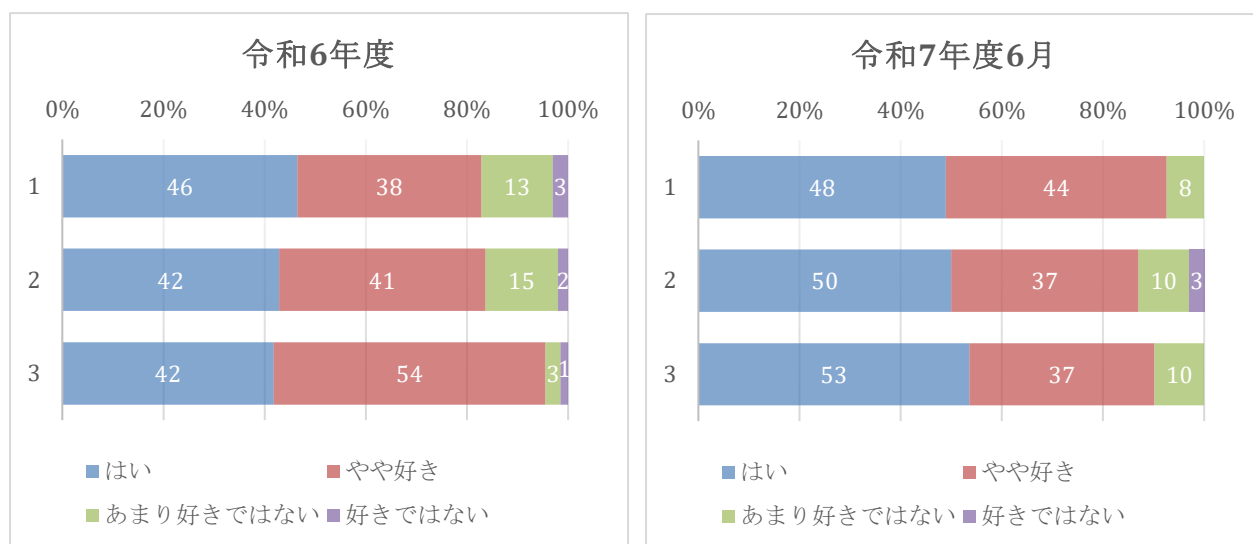
写真⑦ 3年生の話し合いの様子



写真⑧ 1年生の話し合いの様子

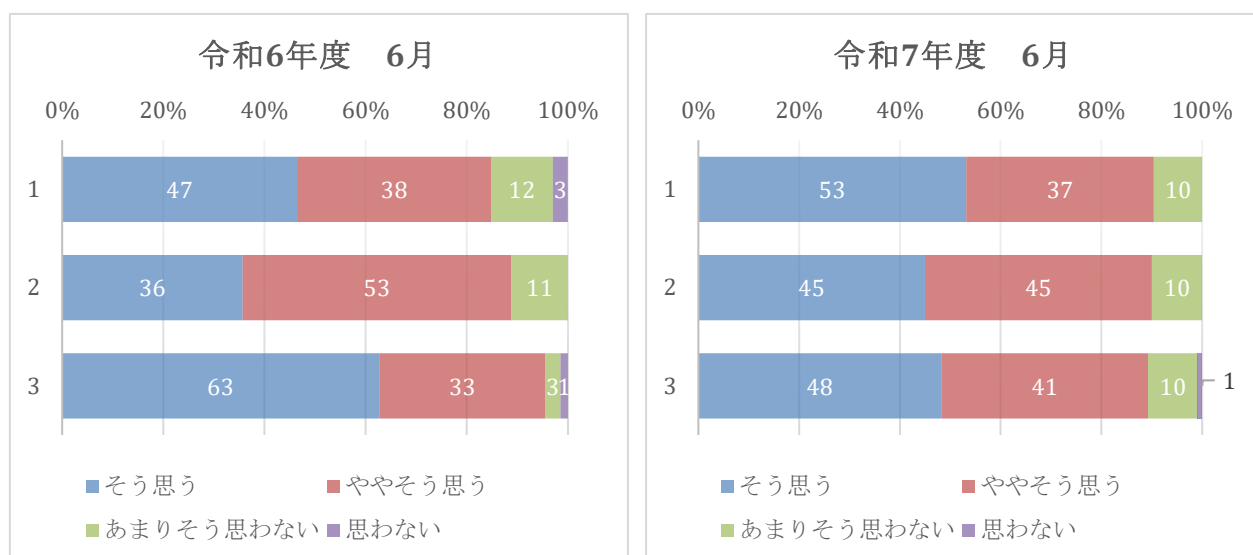
(2) アンケート結果より

①「話し合うことは好きですか。」（縦軸数字は学年）



話し合うことに関して、「好き」「やや好き」と回答した全校生徒の割合は令和6年度は86%いたが、令和7年度には90%と話し合う活動を好意的に捉えている生徒が増えた。「好きではない」と答えた生徒は半分に減少している。このことから、話し合いの形態やルールを工夫することで、苦手な生徒も抵抗なく話し合いに参加できるようになってきていると考えられる。

②「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」

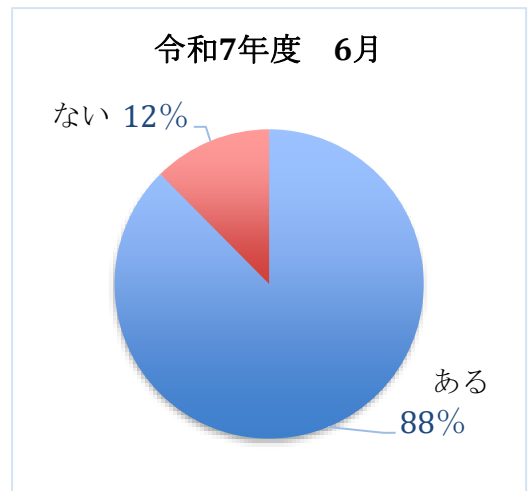


現在の3年生は「そう思う」と回答した生徒は昨年度より12%増えている。また、現在の2年生は肯定的な回答をする生徒が昨年度より5%増えた。この結果から、生徒たちが話し合う活動に対して、以前よりも前向きな価値を見出していると思われる。教師側の授業の工夫なども要因として考えられるが、生徒たちに話し合いのスキルが身に付き、話し合いの場で得られるものが増えたと生徒が感じることができるようになったことで、話し合いに肯定的な生徒が増えたと考えている。

③「話し合いをしてよかったことはありませんでしたか。」

話し合いをしてよかったことはありませんでしたかという質問に関して、「ある」と回答した生徒は88%だった。その理由に「問題を解決できてうれしかった」や「相手の考えがよくわかった」、「自分と違う意見があり、いろいろな視点から考えることができた。」、「新しい考えを持つことができた。」があった。他にも「自分の考えが広がったり、深まったりした」「自分の意見に自信が持てるようになった」などがあった。

多くの生徒が話し合いに価値を見出していることが分かる一方で、残りの12%の生徒が否定的な意見をもっていることにも着目した。「うまく自分の意見を言えない」や、「話し合いは時間がかかりすぎる」などの効率性に疑問を持っている意見が含まれていた。



(3) まとめ

どの授業においても話し合いを取り入れることを意識して授業を組み立てることで、自分の意見をもってから話し合う対話のテーマ、仕組みなどの設定を共有し、授業に生かすことができた。また、対話活動を取り入れたことで、相手を意識した聞き方、話し方をすることができるようになり、様々な授業で、生徒たちは話し合い活動を行い、以前より自分の意見をもって話し合いに参加する様子が見られるようになった。

一方で、話し合いにとらわれるあまり、教科のねらいから離れることが課題としてあがっている。このことを防ぐために、教師側が学習の軸を確実にもつ必要であること、対話を深めるために生徒一人一人の見取りや、添削を継続的に行うこと、そして、授業中に出た生徒の多くの意見をまとめたり、新たな角度から考えさせたりする発問を磨くこと、どこまで話し合わせるかを明確にして授業計画を立てることが必要であることがわかった。

話し合いの後に、学んだことや反省点をR80を用いて振り返ることで、生徒が次に繋げることができる。今後は、その振り返りの際に、他の人の意見を聞いて自分の考えがどのように変化したか、どのような点が深く考えられたかなどを共有できるような取組を行いたい。また、生徒が互いに問い直し、複数の視点を持って考えを深めることができるような話し合いを授業の中に取り込めるようにしていきたい。

【チームR】

本研究チームでは、生徒の「資料を正確に読み取り、自己解決力を高める姿」を引き出すために、次のような取組を行った。

(1) 具体的な取組

① 家庭学習振り返りシート

生徒が日々の学習内容を記録・分析し、自らの学習実態を読み取ることで、学びの質を高めることを目的とした取組である。令和6年6月に導入以来、全学年で継続して実施している。このシートの活用を通して、本研究チームでは、生徒の「資料を正確に読み取り、自己解決力を高める姿」を引き出すことを目指し、日々の学習と振り返りによる自己調整学習力の向上に取り組んでいる。

・学びを「見える化」する

家庭学習振り返りシートを活用し、日々の学習を記録し、振り返ることで、学びを「見える化」し、自己調整学習の質を高めていく。

・グラフ化による自己分析する

学習時間や教科別の取組をグラフで示すことで、自分の得意・不得意が明確になり、効果的に学習できる。さらに、そのデータを読み取ることで、自分の考えを整理し、深めることができる。

・計画的に学ぶ力を育む

自分の学習目標や反省点、次に取り組むことを具体的に記入することで、計画的に学ぶ姿勢を育む。また毎日コツコツと記録を続けることで、学習効果も高まる。

資料⑧ 定期テスト終了後の振り返り（生徒の振り返りシートより）



資料⑨ テスト後の振り返り

テスト勉強はどうであったか？（計画表やグラフを参考にしながら、まとめてみよう。）

すべての教科をバランスよく学習していたつもりではあったが、国語・数学・英語の勉強時間が多く、逆にその他の教科はあまり勉強できていなかった。

テスト中の取組はどうであったか？

主にワークの解き直しや練習問題を解いたりした。だが、自分が苦手な分野の基礎を何度も復習しなかったから今回の結果につながったのだと思う。

次に向けて具体的にどのような努力をしていきたいか。（1文目には自分の課題を明確に書く。接続詞でつなぎ、2文目には、これからどのような取組をしたいかを書く。）

苦手な教科（理科・社会）を分かるまで学習できていなかった。だから、理科や社会の苦手なところを中心に何度も復習し、基礎の問題・応用問題を繰り返し解く。

資料⑩ 【家庭学習振り返りシート】の取組における成果と課題

●家庭学習振り返りシートを使うことで、学習の必要性を実感しますか。



●家庭学習振り返りシートを使うことで、学習意欲が高まりますか。



●家庭学習振り返りシートを使うことで、計画的に家庭学習を進めることができますか。



●家庭学習振り返りシートを使うことで、家庭学習が定着してきましたか。



【成果】

・学習意欲の向上

毎日の記録を続けることで、学習の必要性を実感し、計画的に学習を進める力や自己解決力が高まり、学習に積極的に取り組む生徒が増えている。

・成果の実感

振り返りシートの記録や成果を振り返ることで、学びの効果を感じる生徒が増えてきている。

・学習の継続性

計画的な記録が習慣となり、学習を継続的に行う生徒が増加している。

毎日の小さな積み重ねが学習の定着を支える要因となっている。

【課題】

・しっかりとまとめができていない生徒が多い。

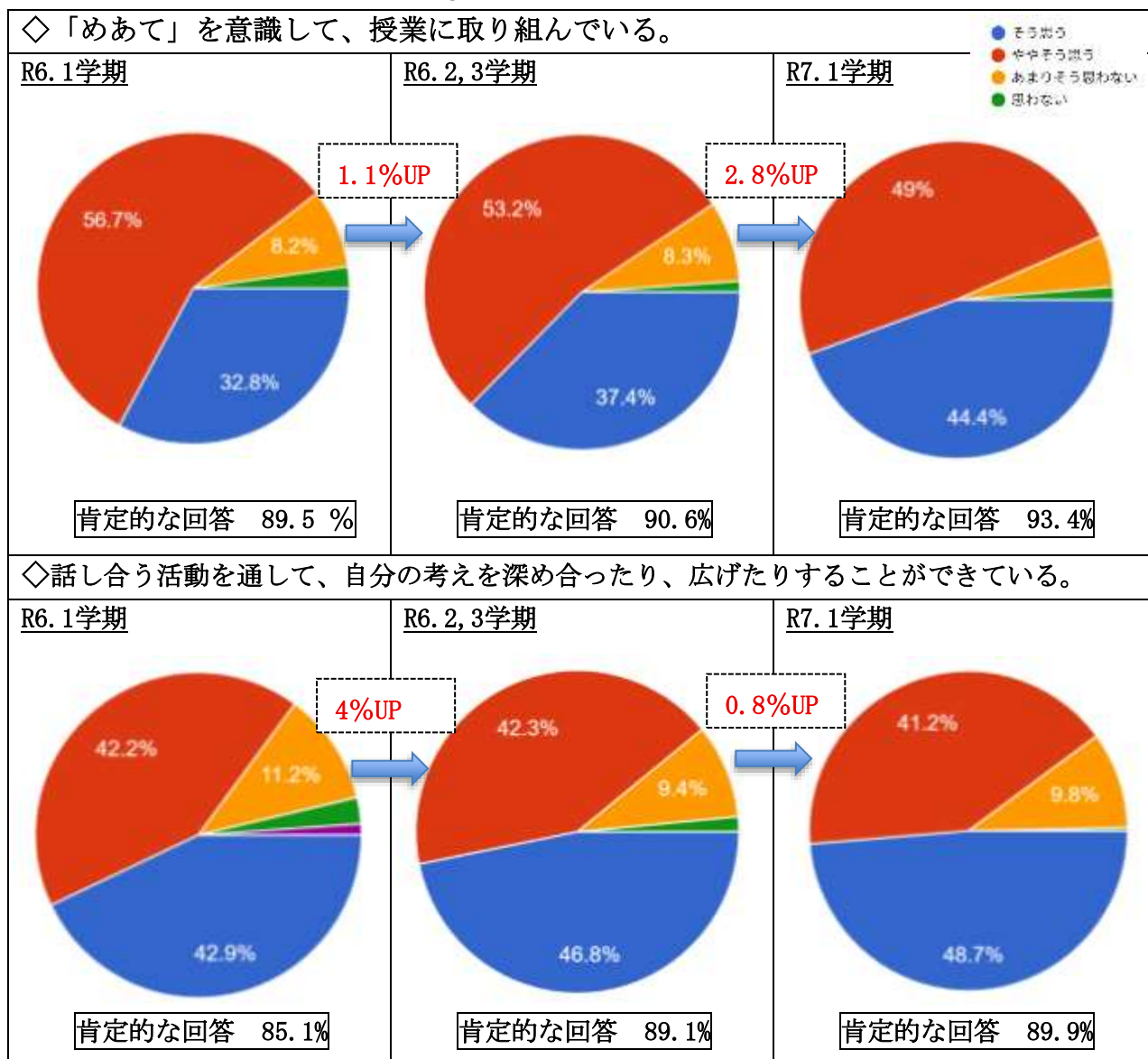
学習内容が十分に整理されていないため、記録が曖昧になり、正確なデータを得ることができない。

振り返りに十分な時間を割けておらず、記録やデータを活用した深い分析やまとめに至っていない。

②研究推進アンケート

- 研究実践の進捗状況を定期的にアンケートによって確認し、その結果をもとに教師と生徒の意見を反映させることで、より効果的な学習環境の提供を目指す。
- アンケート実施により、生徒の学習への意識や授業に対する姿勢の変容を把握し、授業改善に活かしている。
- 「鳴北中授業改善」のために以下の点を意識して、主体的に学ぶ生徒を育成する。
 - ・生徒から学習の「めあて」を引き出し、主体的に学ぶ態度を養う。
 - ・思考ツールなどを活用し、自分の考えを整理・表現する場面を設定する。
 - ・根拠を基に互いに問い直し合う対話の場を設定し、学びを深める。
 - ・議論の深まりを通して、個々の表現力が高まっているかを確認する。

資料⑪ 特に成果の見られた項目



(2) まとめ

アンケート分析により、生徒たちが学習の目標を意識して授業に臨む姿勢が徐々に高まっていることから「めあて」を意識した学習態度の定着が感じられる。また、対話を通して生徒の「主体的な学びの場」や「異なる視点を持つ場」、「問題解決を行う場面」が増え、「対話で学びを深める協働学習」による学びの広がりが見られるようになった。

一方で、多くの生徒が学習の目標を意識して授業に臨んでいるが、一部の生徒はまだ意見を出すことに消極的であったり、めあてを十分に生かしていなかったりする場面も見られる。また、話し合い活動の機会は増えているが、自分の考えを十分に深めたり、他者の意見を建設的に受け入れたりすることができない生徒もいる。このような課題に対して、目標意識をより定着させるために、生徒自身がめあてを具体化し、授業中に振り返る仕組の工夫や、表面的な意見交換にとどまらず、根拠に基づく対話や問題解決型の協働学習をさらに充実させる工夫、さらに、発言に消極的な生徒たちのために、全員が安心して意見を出せる場の工夫等が必要であることがわかった。

7 研究の成果と課題、今後の展望

(1) 全国学力・学習状況調査の結果から

全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査で課題となった項目の追跡結果は、以下のようになっている。

質問項目	令和5年度実施			令和6年度実施			令和7年度実施		
	本校	県	全国	本校	県	全国	本校	県	全国
①自分の考えを発表する場面では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか	16.3	18.3	21.9	11.0	18.5	22.2	<u>20.0</u>	14.0	18.9
②課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	20.9	25.8	30.4	26.8	23.6	27.2	<u>26.7</u>	19.9	23.4
③授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、活かしたりすることができると感じますか	22.1	20.1	24.0	23.2	24.3	27.5	<u>25.0</u>	20.7	23.5
(追加) 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか							<u>19.2</u>	19.8	23.0

令和5年度時点で課題となっていた項目については、今年度実施の調査においては、いずれにおいても県や全国の数値を上回ることができた。その一方で、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問項目においては、今年度、県や全国の数値を下回る結果となった。このことから、生徒たちは「できた」「わかった」という実感を持つことができれば、次の学びへ意欲的に取り組むことができているが、「わからなかった」ことに対する粘り強さが不足しているようにも受け取ることができる。

(2) 教師アンケートの結果から

研究の成果を振り返るために、教師対象のアンケートを実施した。自由記述の回答の一部を紹介したい。

(質問1) 本校の生徒たちは、自ら課題を発見し、その課題に当事者意識を持って向き合うことができていると思いますか？

○ 「めあて」の提示を工夫したことで、多くの生徒が見通しを持って、課題と向き合えた。
○ 自由進度の要素を取り入れた単元では、自分の習熟度に合った課題を選び、その克服に向けて努力する姿が見られた。
○ 生徒総会においても、自分たちで課題を見つけ出し、積極的に意見を出し合う様子が見られた。
○ 授業の振り返りの際に、新たな課題を見つけ、次の学習に向かおうとする生徒が増えた。
△ 未だ、教師主導で課題を提示してしまうことが多くある。
△ 授業においては、教師が仕組むことで課題意識を持って取り組む姿が増えてきたが、学校生活の面では、係や当番の目線から自分たちで課題を見つけるということができていないように思える。
△ 学習規律や支持的風土の醸成などに課題が見られるが、その課題に対して、生徒たちが自分の力で解決しようとする姿が見られない。生徒の自治活動によって学校生活の課題が解決できるよう、教師側が意図を持って仕組んでいかなければならない。

（質問２）本校の生徒たちは、課題に対して自分なりの考えを持ち、それを相手に伝えるよう工夫しながら表現することができていると思いますか？

- 単元のまとめや自分の考えをまとめる場面では、論理的に文章を書く生徒が以前より多くなった。
- 言葉遣いだけでなく、身振り手振りで表現しようとする生徒が増えた。
- 問いに対する自分の考えを書く場面を授業の中で多く設定したことにより、「まず自分の意見を主張し、その後根拠を述べる」という作文の構築に慣れ、定期テストでも無回答率が減った。
- △ もともと話すことが好きな生徒とそうでない生徒で差があり、その差や割合は変わらなかったように思える。
- △ １年生については、「根拠を基に自分の考えをまとめる」活動で精いっぱい、「工夫して伝える」という表現力の育成については、取り組めていない。「自分の考えをより効果的に相手に伝えるためにはどうすればよいか」ということを日々指導する必要がある。

（質問３）本校の生徒たちは、多様な意見を基に、より良い解を求め、次の課題発見へとつなげることができていると思いますか？

- ペア活動などの後、様々な意見を学級で共有することができるようになり、次の学びで活かそうとする姿が見られた。
- 相手の話の聞き方も以前より良くなり、話し合いが活発になってきているように思える。
- 授業中に分からないところを共有し、発言する場面を設定している。誰かが抱いた疑問や他の生徒のつまずきも大切にして、理解を深めようとする雰囲気がある。
- △ 与えられた課題に対しては真摯に取り組むが、そこから発展的に課題を見つけることができていない。
- △ より良いものを求める雰囲気を生み出すためには、学習習慣を身に付けさせることや、学習規律を徹底させることを同時に進めなければならない。

（３）今後の展望

各チームのまとめや教師対象アンケートの結果等から、次のような点について成果を感じることができている。

- ・生徒が「自分の考えをまとめる力」を身に付けること
- ・生徒が学びを深めるために「周囲との対話が効果的である」と感じる事

一方、研究を進める中で、生徒に学習習慣の定着を図ることや、学習規律の徹底、支持的風土の醸成などの「学ぶ環境づくり」の大切さを再確認した。これらは学校生活の「土台」であり、私たちが力を入れなければならない部分である。引き続き、教師が一丸となって取り組むとともに、授業で身に付けた「課題を共有し、その解決に主体的に取り組む態度」が、学校生活の随所で生きるような工夫を講じていきたい。そのために、生徒会役員生徒などを中心としたリーダーを育成し、生徒の自治活動の活性化を図ることにも一層力を入れていきたい。

今後は、これまでの研究実践に加え、さらに、生徒が選択したり自己決定したりしながら、自ら学び方を考え、その学び方を振り返るなど、学習の自己調整を行いながらより良い学びへと深めていく力を身に付けさせることを目指したい。

これまでの３か年にわたる研究を進めてこられた研究同人の先生方に感謝するとともに、これから全職員一丸となり、だれ一人取り残すことなく学力の定着・向上を目指した歩みを進めていく所存である。